

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第103回

地域の飲食店を支援! 全国に広がるテイクアウト・お弁当MAPの取り組み

● Code for Fuchu 副代表／共創デザイナー
齋藤 善寛(さいとう よしひろ) [Twitter](#) @fuchubentoprj

新型コロナウイルス感染拡大に伴ってあちこちの飲食店がテイクアウト営業を始めています。今回は、筆者が副代表を務めるCode for Fuchu(東京都府中市)が行った、各飲食店のテイクアウト情報を集約・発信するプロジェクトについて紹介します。

プロジェクトの背景

先述のとおり、新型コロナウイルスの影響で多くの飲食店がテイクアウトや独自のデリバリーサービスを始めています。しかし情報が点在し、必要な方に行き届きにくいという課題がありました。そこで、サービス提供側の飲食店とそれを利用する市民側が協力する「市民協働」を目標として本プロジェクトをスタートしました。

小平市のプロジェクトに刺激を受ける

きっかけは、「こだいらあたりでCivicTech」^{注1}の出口みちたかさんがSNSに投稿していた、東京都小平市の飲食店を応援するシビックテック活動です。飲食店のテイクアウト情報を集めたアプリで、お店の一覧や地図ビューなどがとてもわかりやすいUIで驚きました。これこそ、今まさに地域の方々に必要とされる活動であると感じました。使われている技術について調べてみると、コードを書かずに開発できることがわかり、これなら自分にも作れそうだ!という印象を持ちました。

注1 小平市を活動拠点とするシビックテックコミュニティ。

そこで、以前から交流があるCode for INAGI(東京都稲城市のCode for)の代表である西脇智子さんに「小平と同じような活動を共同で始めませんか?」とお誘いしました。筆者はなかなか活動開始の決断をできずにいたのですが、稲城市では2020年3月上旬にスタートしました。その3週間後に府中市でもプロジェクトをスタートする運びとなりました。

府中お弁当プロジェクトのスタート

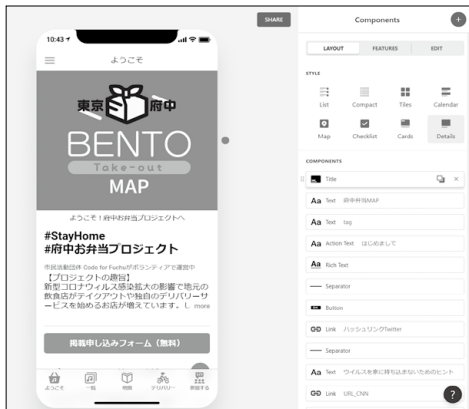
1行もコードを書かずに わずか3時間で完成

稲城市から遅れること約3週間、Code for Fuchu代表の小林ヒロカズさんとWeb会議で画面の共有をしながら作業を進め、約3時間でアプリの大枠を完成させました。このとき2人は、コードを書かずにアプリが作れるプラットフォームのすごさを体感しました。Code for Fuchuの活動を始めて約3年半になりますが、これまで「協創ワークショップ」や「街歩きイベント」など、ITの割合は少なくつながり1番、IT2番の気持ちで活動を行ってきました。Code for Fuchuは技術者の参加が少ないこともあってアプリ開発を経験したことがなく、代表の小林さんや筆者だけで開発することもできませんでした。ですが、今回は「Glide」^{注2}というプラットフォームを活用することで、コーディングレスでのアプリ開発ができました(図1)。Google スプレッドシートのデー

注2 <https://www.glideapps.com/>

地域の飲食店を支援! 全国に広がる テイクアウト・お弁当MAPの取り組み

▼ 図1 Glideの開発画面。画面の要素を並べてスプレッドシートとひもづけるだけでアプリが完成



▼ 図2 テイクアウト・お弁当マップの画面。マップビュー、詳細ビューなどさまざまな形式で店舗情報を閲覧できる



タをどう見せるのかを並べていくだけで、わずか半日でアプリが完成しました(図2)。

実は筆者は飲食店の経営もしており、自分や知り合いのお店の情報を入れるところからスタートしました。そしてCode for Fuchuの関係者から近所のテイクアウト情報を教えてもらい、すぐに10件の情報が登録できました。自分では知らない情報を地域の人々が知っているということに驚き、このプロジェクトの大方針である「ユーザーからの情報を集めて発信する」という流れがこの段階ですでにできていたように思います。このとき、小林さんとは「なぜやるか? 誰のためにやるのか?」をお互いに問い続けながら制作を進めていました。

アプリの一般公開にあたり、各店舗に掲載確認の連絡を行いました。快諾していただけるお店、やめてほしいというお店と、さまざまな反応がありました。承諾をとらずに掲載するということも検討しましたが、店舗ごとの事情を配慮しながら丁寧に掲載確認を行うことに決めました。

▶ アプリ完成後も無理なく運用できた

その後、Google フォームからの投稿をデータソースとした運用がスタートしました。お店のオーナーが自ら掲載を申し込むことはもちろん可能なのですが、ITが苦手な店主に代わりお客さんが申し込むことも可能としました。

毎日のデータ登録、SNS上での発信、ユーザー投

稿への返信やリツイートなどが筆者のおもな作業となります。飲食店からの問い合わせや情報変更依頼への対応も行いました。とてもたいへんな作業でしたが、新たな発見の連続で楽しく無理せず日々運用をしていました。おいしそうなお弁当の情報を見ているだけでお腹が空く楽しい時間でもありました。

▶ SNSのしくみを活用

先述のとおり、このプロジェクトは店舗からの情報だけではなく、地域のユーザーからの情報を集めるしくみも兼ね備えています。ハッシュタグを付けて投稿することで活動が拡大するSNSの特徴を活用しています。アプリを利用しない方もハッシュタグから店舗を知ることができます。

▶ デジタルとアナログの両面から活動を告知

飲食店のみなさんにはポスターの掲示やチラシの配布にご協力いただきました(図3)。米屋さん、酒屋さん、包材屋さんなど、飲食店に関わる方々にもご協力いただきました。アイコン、ポスター、チラシのデ

▼ 図3 店頭用ポスター



ザインはCode for Fuchuの活動をいつも支えてくださっているデザイナー、横須賀ヨシユキさんにボランティアで協力いただきました。制作したチラシデザインは、各店舗に配布したデータを印刷して掲示してもらうかたちで提供しています。

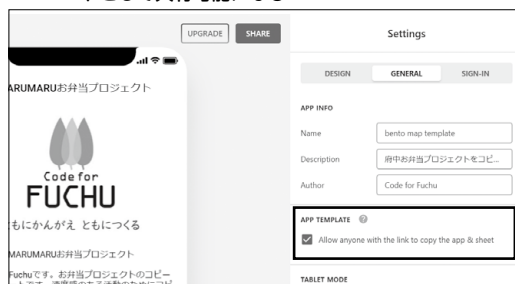
全国に拡大したテイクアウト・お弁当マップ

府中市版アプリが完成した数日後、Glideに「アプリやデータをワンクリックでコピーし公開する機能」があることを発見しました(図4)。

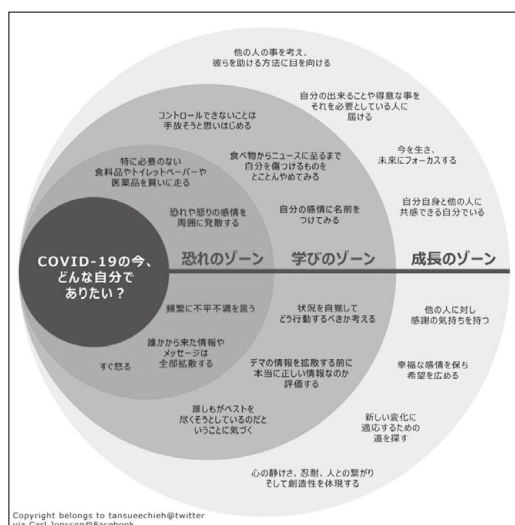
そこで、同じような活動をしたと考えるシビックテッカーに向けて、〇〇^{注3}お弁当マップのテンプレートアプリを開発しました。府中市版をコピー

注3 「〇〇」には各地域の名前が入ります。たとえば府中市であれば「府中お弁当マップ」になります。

▼図4 GlideのUI上でチェックを入れるだけでテンプレートとして共有可能になる



▼図5 恐れから学び、そして成長のゾーンへ



して作りましたので、これも数時間で完成。簡単なインストラクションガイドをアプリ内に記述して公開しました。Google スプレッドシートのデータも含めて丸ごとコピーされるため、画像や文言を変更するだけで簡単にご当地テイクアウトマップを公開できます。

「こだいらあたりでCivicTech」の富永哲欣さんがFacebook グループを作ったり、ブログ記事にまとめたり Togetter にまとめたりと活動が発見されやすい環境が整っていましたので小平、稲城、府中という連携により作られたテンプレートは瞬く間に全国へ拡散されました^{注4}。

各地に存在する起点人物

それぞれの地域には必ず「よし！ やってみよう」と覚悟を決める人がいて、そうしたキーパーソンには仲間がいるものです。そこに、サポートしてくれるコミュニティや、簡単に利用できるテンプレートが加わることで、活動のハードルが下がったのかもしれないと思いました。

筆者がこのプロジェクトを始めるきっかけとなったのがCode for INAGI代表の西脇さんからの「府中も絶対やったほうがいいよ!」という言葉と、図5^{注5}との出会いです。この図には、恐れ・学び・成長という3つのゾーンが存在し、それぞれのゾーンに「COVID-19の今、どんな自分でいたい?」という問いかけの答えが示されています。

各地から進化したテンプレートが公開

テンプレートを公開したことで、そこを起点にトラブルシューティングの方法や、活動を後押しするノウハウが次々とシェアされていく共創のループが形作られました。たとえば、Code for Kitakyushu による北九州テイクアウトマップではアイコンなどのUI周りを含め、機能が向上したテンプレートが公開されました。そのほか、お店のカテゴリ別に分類

注4 次のURL からご当地テイクアウトマップの一覧を見ることができます。<https://obento-takeout.glideapp.io/>

注5 <https://www.facebook.com/rea.fujikura/posts/3196941050318267>

地域の飲食店を支援! 全国に広がる テイクアウト・お弁当MAPの取り組み

された見やすい構成のもの、アプリからの登録機能を有するもの、緯度経度を自動取得できるものなど、独自の進化を遂げたテンプレートも多数存在します。

各地でお弁当プロジェクトが さまざまな領域と連携

東京都稲城市では商工会などが始めた地域デリバリーサービスの情報(図6)がアプリで閲覧できたり、千葉県流山市では音楽プロジェクトと連携したり、徳島県の鳴門市では地元のフリーペーパーと連携したりと、お弁当プロジェクトアプリをきっかけにしてさまざまな領域とのつながりが生まれています。

▼図6 稲城市商工会のデリバリー事業とお弁当マップが連携



めてのコラボレーションが実現しました。

●飲食店利用者の声

「毎日3食の手作りに疲れてしまった。外食は無理でもテイクアウトすることで地元のお店を応援しつつ少し日常を取り戻せる」という主婦の声や、「近所にこんな素敵なお店があったことを知らなかった!」など、ローカル情報を集めて発信するプロジェクトならではの反応がありました。

おわりに

府中でこのアプリが誕生するまでには1日もかかりませんでした。筆者は、今回のプロジェクトでノンコーディング開発の価値に気づきました。「地域の課題を解決したい」という想いを持った方がいさえすれば、コーディングスキルがなくても活動の起点になります。新型コロナウイルスの感染拡大という有事においては課題解決に対するスピードが最も重要となりますが、今回のような開発環境やテンプレートで非エンジニアのシビックテック活動を後押ししたり、プロジェクトをスタートするうえでの壁を低くしたりできるのは、たいへんありがたいことと感じています。

最後になりましたが、この活動で生まれた多くのつながりが明るい未来の地域づくりに続いていくことを願っています。この活動を通して知らなかったお店に出会ったり、地元愛を深めたりしてもらえたら最高にうれしいことです。SD

プロジェクトへの反応

▶ アクセスログの集計

Glideの有料プランを年間契約することで、Google Analyticsの詳細なアクセスログが閲覧可能になります。府中市版ではスポンサー企業がついたおかげで費用を捻出して活動の効果を測定できました。1日あたりの最高は4月15日で、1,002ユーザーからのアクセスがありました。これは東京新聞にテイクアウトマップの取り組みが掲載された影響もありますが、4月後半からGW期間中は1日の平均で600ユーザーほどのアクセスがありました。このころは、毎日2件くらいのペースで新規の飲食店を登録していました。

▶ 各ステークホルダー別の反応

●飲食店

「応援してもらえる気持ちがうれしい」「情報が拡散されるしくみで取り組みが伝わっていくのがある」「MAPに掲載されてから売り上げが倍増した」といった反応がありました。

●商工会議所などの団体

地元の商工会議所が同様のプロジェクトを行うことになり、連携して進めていくことになりました。内容は相互リンクというシンプルなものですが、初